エッセイスト

森下 典子さんに聞く

［聞き手］外川 智恵さん　大正大学表現学部教授

自分の居場所を教えてくれた茶道文章を綴る人生は“日日是好日”

CLOSE UP

もりした・のりこ

1956年生まれ、神奈川県出身。日本女子大学文学部国文学科卒業。『週刊朝日』でアルバイトとして執筆活動をスタート。1987年に『典奴どすえ』(朝日新聞社)でデビュー。2002年に刊行した『日日是好日「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』(飛鳥新社、のちに新潮文庫)が話題となり、2018年に映画化された。

人に伝えるため自分を丸裸に

外川　築60年の民家をすてきな和の空間にリフォームされたこのお宅にお住まいなのは、エッセイストの森下典子さん。舞妓を体験取材した『典奴どすえ』がベストセラーとなり、長年の茶道の稽古を通じて得た気付きを書いた著書『日日是好日「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』は現在もロングセラーを続けており、映画化もされました。今回はそんな森下さんに、お話を伺いたく思います。本日、森下さんは取材される立場ですが、長年、記者やエッセイストとして取材する側でもいらっしゃったわけですよね。

森下　22歳で『週刊朝日』の取材記者のアルバイトを始めたのが出版の世界に入ったきっかけで、約8年間はお話を聞く立場でした。30歳の時に初めて『典奴どすえ』を出版してから取材される立場にもなりましたが、その後もインタビュアーの仕事を続けていましたので、両方の立場を行き来していますね。

外川　私はアナウンサーだったこともあり、取材する立場が多く、相手に失礼のないように気を遣うことはあっても、自分自身を発信するということはあまりありません。エッセイストはご自身の体験や考えを作品として世に送り出す、自らを丸裸にするような仕事のように思いますが、そこに不安を感じるようなことはおありでしょうか。

森下　私はとにかく自分のことばかり書いてきたので、ある意味、自分の人生を切り売りしているようなものです。もしかすると、自分の人生のルポを書いているのかもしれません。自分が何を見てどう感じたかをできるだけ分かりやすく伝えたいと思っているのですが、そのためになるべく丸裸になれるように意識はしています。これを知られたら嫌だとか、内面を隠そうと思ったことはあまりないですね。隠そうとしていることに気付いた時には、どうして隠そうと思っているのか、理由を考えるようにしています。

心から書きたいことを丁寧に書きたい

外川　その潔さ、すてきですね。

外川 智恵さん

ご自身がエッセイストであると意識して仕事をするようになったのは、いつ頃でいらっしゃいますか。

森下　『週刊朝日』でアルバイトを始めてから約10年間は、フリーライターの肩書で活動していました。例えば、スカイダイビングや富士登山、看護師に扮（ふん）して出産に立ち会うなど、さまざまな体験を通して感じたことをルポとして書いていました。そうした活動の中で、舞妓体験をまとめた『典奴どすえ』が初めて本として世に出ましたが、その後、頂く仕事は体験ルポばかり。そのうち、自分は一体何者なのか、この先もこうして自分自身を消費していくのかと悩むようになりました。心から書きたいことを、丁寧に書く仕事がしたい。そう思うようになった頃、ちょうどエッセーの連載のお仕事を頂いたんです。それを機に、エッセイストの肩書きを使うようになりました。いろいろな仕事をしてきた結果、エッセイストになったという感じですね。

外川　あくまで私の印象ですが、エッセーはスタイルに縛りがない分、書くのが難しそうに思います。

森下　確かにエッセーって自由で幅広い。今までやってきたルポのように何か体験したことについて書く時もありますし、何もしていないけどある日の気持ちや気付いたことについて書くこともあります。エッセーって何だろうと考えたこともありますが、最近は、自分の視点から書くのであれば、全部エッセーとしてまとめてしまってもいいのかなと思っています。

森下 典子さん

オーソドックスな人生から外れて

外川　文章を書く仕事に就きたいという思いは、以前からお持ちでいらっしゃったのですか。

森下　物書きに憧れはあったのですが、自分の中から物語が浮かんでくるわけではありませんでした。ですから、子どもの頃は小説家というよりも、兼高かおるさんのようなジャーナリストや、淀川長治さんのような評論家になりたいと思っていました。でも、どうすれば文章を書いて生きていけるようになるのか分からない。そこで、就職活動では書く仕事に近い業種として、出版社と新聞社

を受けました。全て落ちてしまいましたが。

外川　確かに作家のなり方なんて誰も教えてくれないですし、分からないですよね。

森下　だから私は、すでに作家として活動している人にお手紙を書いたんです。どうすればあなたのような仕事ができますか？と。返事が来たこともあれば、実際に会いに行ったこともありました。そんなふうに学生時代は、この先どう生きていけばよいかを模索していましたね。

外川　行動力がすごいです。そのお力がその後のお仕事にもつながっていらっしゃるのでしょうか。先ほど、就職試験に全て落ちてしまったとおっしゃいましたが、それをきっかけにフリーランスとして活動を始めるという選択もユニークだと感じました。

森下　私が大学生だった時代の世の中では、就職試験を受けて会社に入るというのが「まっとうな人生」とされていましたので、絶望しましたね。就職浪人が決定したから、1年間アルバイトをして、また来年就職活動をしようと思っていたところ、ご近所の知り合いから『週刊朝日』でコラムのネタ集めや記事の執筆をしてくれる人を探しているからやってみないかと声を掛けていただいたんです。まずはやってみてから入社試験を受ければいいじゃないかと。そこでアルバイトとして編集部に出入りするようになり、無署名の小さな記事を書くことから始めました。まだ在学中だったので、卒業論文を書く傍らでした。

外川　どんな記事を書いていらしたのですか。

森下　ちまたの面白い話を集めて紹介する「デキゴトロジー」というコラムを担当していたのですが、何を面白いと感じるかというセンスが問われる仕事でした。担当の編集者から例としてネタをいくつか挙げてもらったのですが、本人は至って真面目にやっているのに、はたから見ると滑稽であったり、どこか人間のおかしみを感じたりする内容で、読んだ瞬間、私に向いているなと思い

ました。文章を書くに当たって注意されたのは、絶対にうそを書かないことと、かっこよく書かないこと。とにかく誰にでも分かる文章を書きなさいと言われました。難しい政治に関する記事なども載っている週刊誌の中で、「デキゴトロジー」は異色の娯楽のページでしたから。

外川　右も左も分からない仕事を始めたばかりの時に、文章を書く際の指針となることを教えてくれる方の存在はありがたいですね。その方の教えは今でも森下さんの中で生きていらっしゃいますか。

森下　その編集者の方はもう亡くなってしまいましたが、とても大きな影響を受けました。その方のような文章を書きたいとずっと思っていて、今でもその方が書いた記事を取ってあります。エッセーを書くようになった今でも、分かりやすく書くことは常に心掛けています。

2本のレールが一つにつながる

外川　アルバイト記者として出版の世界に入って著書を出し、取材される側にもなられた森下さんが、文筆活動を続ける中で転機になった出来事はおありですか。

森下　やはり、『日日是好日』を書いたことは大きかったですね。私の人生にはいつも2本のレールがあったんです。1本が文章を書いて生きていくレール、もう1本が茶道の稽古というレールでした。文章を書くことを仕事にするようになったのが22歳の時で、母から勧められてお茶のお稽古を始めたのが20歳の時ですから、ほぼ同じくらいの期間、2本のレールを走り続けてきました。それが初めて1本につながったのが、45歳の時に茶道について書いた『日日是好日』だったのです。それまではどんな依頼も断らずに受けるのが取りえのように仕事をしていました。しかし同時に、得意とするジャンルや専門は何かと聞かれると答えに困ってしまうことに悩んでいました。インタビュー記事も書くし、映画評や書評も書く。だけど、私にしか書けないものは何なのかが分からなかった。けれど、『日日是好日』を書いたことが、世間からお茶について書く人、一つのことを長く続けている人と認識してもらうきっかけとなり、そういうテーマの原稿を依頼されるようになりました。そこで初めて、自分の場所が分かったのです。それさえ分かれば、あとは何について書くとしても、自分の居場所から見えるものを書けばい

いのだという気持ちになりました。

外川　長く続けてきたことが一つにつながり、自分自身の居場所が分かるのは、とてもすてきなことですね。お話を伺いながら思い出しましたが、臨床心理学では人の一生は自己を統合していくようなものだといわれています。森下さんのお話から、私自身、自分をまとめ上げていく途中であるし、バラバラな部分はこれからまとめていってもいいんだと感じました。

森下　2本のレールがつながったことに気付いたのは、つい最近のことです。70歳を目の前にして、人生を振り返る機会が増えましたが、ようやく振り返れる過去ができたのだと思っています。ずっと、足元を見て歩くのが精一杯でしたが、自分が歩んできた道を振り返ることができるようになりました。バラバラな点でしかなかったものが、ある時、振り返って眺めたら、一つの物語になっていた、とでも言いましょうか…。

外川　私も森下さんのお年になった時に、自身の道のりを振り返れるようになりたいです。ところで、マイルストーンともいうべき『日日是好日』はどんな思いで執筆されたのですか。

森下　いつか茶道について書いてみたいという気持ちはずっと持っていました。なぜかというと、お稽古を始める前に想像していた茶道と実際の茶道があまりにも懸け離れていたからです。自分でやってみないと見えない景色がある。それを文章を通して伝えたかったのです。

茶道に集中することで自己を解き放つ

外川　茶道は森下さんにとってどのような存在だったのですか。

森下　フリーライターという、当時のスタンダードな生き方からはやや外れた仕事をしていましたから、親も心配していましたし、会社に属しているわけではないから、いつまで仕事があるかも分からない。かといって人生の選択を間違えたとは思いたくないし、これで良かったのだと納得して生きていきたい。そんなふうに悩みを抱えて悶々（もんもん）としていた時、救いになったのが茶道だったんです。週1回、お茶のお稽古に通っていたのですが、行くまでは悶々としていたのに、帰ってくる時には不思議と爽快感に包まれていました。

外川　祖母が茶道の師範だったことから、私も小学校の頃にお稽古場にいましたので、そのお気持ちが分かるような気がいたします。

森下　私にとって稽古場は、自分の感覚を安心して解き放てる場だったんです。静かに吹いている風の音や雨の音、茶せんを振る音、お釜で沸く湯が立てる松風（しょうふう）の音。それに身を任せていていいのだという安心感がありました。また、お茶席ではさまざまな作法でがんじがらめにされますので、日頃抱えている数々の葛藤を無理やりにでも手放さざるを得ない。それが私にとって大きな救いになりました。

外川　何かに集中することで雑念が取り払われるような感じでしょうか。

森下　そうですね。茶道の作法って、そう簡単には覚えさせないぞと言わんばかりに次から次へと変わりますよね。季節ごとに作法だけでなく道具も変わる。やっと覚えられたかと思ったら、また違うことを覚えないといけなくて振り回される。そんな具合に、強引にでも茶道に集中せざるを得ない環境が巧みにつくられているように感じるんです。昔の人も茶道に、そういうものを求めていたのではないかと。

外川　戦国武将が茶の湯を嗜（たしな）んだのもそうした理由があったのかもしれませんね。

森下　おっしゃる通りです。当時、戦国武将は判断を間違えたら一族郎党が滅ぼされるような状況に置かれていました。そんな中で、茶室は刀を持って入れない、本当に一個人になって安心できるような空間だったのではないかと思います。当時は茶道具一つが城一つの価値を持つような時代でしたが、そうしたステータスだけでなく、茶道そのものに魅力を感じた武将も多かったはずです。

数寄屋橋交差点で見た光景

外川　『日日是好日』が映画化もされた時は、どのような

お気持ちでしたか。

森下　『日日是好日』を書いたのが45歳の時で、映画化のお話を頂いたのが60歳になる時でした。随分時間が経ってからの映画化でしたが、担当編集者と手を取り合って喜んだのを覚えています。映画が公開されてからは、映画のモデルになった人として取材されるようになって、本当に不思議な気持ちでしたね。

外川　学生と話していると、社会に出ることや将来に対して不安を感じていることも多いのですが、森下さんの生き方は彼らに希望を与えるように思います。

森下　『茶の湯の冒険』という本の冒頭にも書いたのですが、私は大学4年生の時、就職試験に全て落ちて、数寄屋橋交差点に立ち尽くし、絶望していたんです。こんなにたくさんビルが立ち並んで、いろんな会社があって多くの人が働いているのに、私を欲しいと思ってくれる所はどこにもない。世の中から拒絶されているのだと感じました。それから随分経って還暦を迎えた頃、たまたま仕事で銀座に行って帰る時、数寄屋橋交差点を通ったんです。そこで風景を見た瞬間、大学4年生の時に同じ場所に立ちながら絶望していたことを思い出したのです。その時に思いました。あの日、絶望していたけど、それから40年近くずっと文章を書いて生きてこられたんだ、60歳になるまでなんとか生きてこられたんだと。だから学生の皆さんにも伝えたいですね。今は不安かもしれないけれど、どんな未来が待っているか分からない。絶望せずにこれからの人生を楽しみにしていてくださいと。

外川　本当にそうですね。絶望して何もしないでいたら、何も始まりませんからね。

森下　ある新聞に載っていた『茶の湯の冒険』の書評に、「自分の心に従って生きていけば、僥倖（ぎょうこう）が起こる」と書かれていたのです。本当にありがたいと思いましたね。私は書いて生きていく以外の道を断ってしまった。でも、自分が決めた道が正しかったと思える日がいつか来ますようにと願いながら、週1回のお茶のお稽古をよりどころにしながら、ひたすら一生懸命書いてきた。そうしたら、まさに僥倖が起きたんです。

年を取るって、すてき

外川　森下さんのように自分の心に正直に生きていくた

めには、どうすればいいのでしょうか。

森下　器用じゃないから正直に生きるしかなかったというのが事実ですね。もっと器用だったらこんなにヒヤヒヤするような生き方をせず、もっと人生に保険を掛けるような生き方もできていたと思います。とにかく生きていくために、頂いた仕事を締め切りに間に合わせるのに必死でした。ですから、今思うと赤面してしまうような恥ずかしい文章もたくさん書いてきたと思います。でも、そうするしかなかったんですね。

外川　私も失敗だらけの人生です。このままで大丈夫かなと思っていた時に、メンターから「大丈夫。年齢を重ねれば、自然とその年齢らしいことができるようになるから」と言われたことがあります。森下さんのお話を伺っていて、その言葉を思い出しました。

森下　負け惜しみじゃなくて、年を取るって本当にすてきなことだと思うんです。若い頃は高い所から自分を地面にたたきつけるような絶望の仕方をしていましたが、今は自分を上手にいなせるというか、そこまで自分を追い込まなくてもいいんじゃない？と思えるようになりました。先ほどもお話ししましたが、年を取ってようやく自分の人生を遠目から見られるようにもなる。若い頃は過去を振り返るなんてネガティブなことだ、もっと前を見て生きろというようなことを言われたものですが、最近は喜んで過去を振り返っています。今まで、体験ルポの仕事などでもいろいろと危ない橋も渡ってきましたが、何かのご加護があったから無事に生きて来られたのだろうと思います。これからも自分の心に従って生きていけば、また僥倖が起きるかもしれない。それを楽しみにしながら、何かのご加護に感謝しつつ、生きていきたいと思っています。

外川　若い時は年を取ることを不安に思っていましたが、自分が年を重ねるとイメージが大きく変わりますし、森下さんのお話にこの先も楽しく生きられる！と、勇気を頂きました。本日は貴重なお話をありがとうございました。